HOLTON NONAKA

新・楽器の流儀

「音がきちんと並んで、音程に癖がない。ホルトンの魅力は、何よりもまずコントロールしやすさ」

中島大之さん（NHK交響楽団ホルン奏者）

子供の頃から耳にしていたオーケストラのホルンの音にひかれて

――ホルンと出会ったのはいつ頃のことですか？

中島　中学の頃ですが、1年のときは陸上部でしたから、ホルンを吹こうなんて思いもしませんでした。でも、物心ついた頃からバイオリンを習っていたし、小学生の頃からホルンの音は好きだったんですよ。実家が札幌で、クラシック好きの母親によく札幌交響楽団のコンサートに連れていってもらっていたのですが、いい音がする楽器だなとは思っていました。

――それがなぜ？

中島　中学1年の文化祭のときに、吹奏楽部の演奏を聴いて「あ、僕もやりたいな」と。で、中学2年になってホルンを吹きたいと入部したんです。そして、やるからにはちゃんと奏法を学びたいと思って、当時札響の窪田克己先生に師事しました。ただ、進んだ高校には吹奏楽部もオーケストラもなかったので、アマチュア・オーケストラの札幌フィルで演奏させてもらっていました。でも、進路をどうするか考え始めた頃、いったんホルンをやめようとしました。進学校だったものですから北大の医学部を目指そうと思って、窪田先生のところに「大学受験のことも考えなきゃいけないのでホルンをやめます」と言いに行ったんです。

――音楽の道に進む気は？

中島　まったくありませんでした。趣味のつもりだったし、自分が音大に行けるなんて思わなかった。でも、窪田先生が真っ青になって飛んできて、両親に「大之君は必ず東京芸大にストレートで入れますので、ご両親から本人を説得してください」みたいなことをおっしゃったんです。それで、そんなに先生がおっしゃるならやってみようかと。今思うと、いい先生だけど、ちょっと無責任な（笑）。

――でも、実際に芸大にストレートで入られて、プロになられたわけだから（笑）。その後も順調に？

中島　しばらくは順調でしたね。大学2年の頃からプロのオーケストラにエキストラでやとってもらえるようになって、4年の頃には東京中のオーケストラで吹くようになっていました。その流れで、卒業して1年後くらいに東京フィルハーモニーに入団。それくらいまでは本当に順調でしたね。

――その後、何か？

中島　東フィルに入って3年目くらいかな。ちょうどオーケストラという仕事に慣れて、自分でも自信がついてきた頃、歯の治療を受けているうちに、吹けなくなってしまったんです。もともと歯並びは悪かったし、歯の長さもまちまちだったので、いろいろな人のいろいろな意見を聞いて、いろいろやってたら、どんどんダメになっていった。微妙に歯並びが動いてしまったせいで、半年くらい仕事ができない状態になってしまいました。

▲H105ERを前にしてホルトンの魅力を語る中島大之氏

今も、完璧ではありませんが、なるべく最初の歯に近い状態に復元しましたが。

――管楽器奏者にとって歯は重要ですね。

中島　ええ。中学生や高校生など楽器を始めて間もない段階で変わるぶんには順応できると思いますが、プロになってから変わってしまうと、それはもう大変でした。

初めて自分で買った楽器がホルトン 決め手はコントロールのしやすさ

――ホルトンはいつ頃から愛用されているのですか？

中島　東京芸大1年生の夏だったか秋だったか、自分で初めて選んで買った楽器がホルトンです。札幌にいる頃はメーカーなんてほとんど知らなかったのですが、芸大に入ったら周りの人がいろいろな楽器を吹いていた。それで、いろいろ吹かせてもらって、ホルトンに決めました。

――決め手は？

中島　ひと言でいえば、いちばん吹きやすかった。音程に変な癖がなかったので、とてもコントロールしやすかった。ホルンにはとかく特徴的な音程、音の配列がある楽器が多いのですが、ホルトンにはそういうムラがない。バイオリンをやっていたおかげで絶対音感があるのですが、この音が高いとか、低いとか、楽器なりの音程の癖があると非常に気持ち悪いんです。ホルトンにはそれがない。今もホルトンを使っている理由はまさにそれです。

――ずっとホルトンを？

中島　東フィル入団後、他のメンバーに合わせてあるメーカーのホルンに替えたんですが、30歳でNHK交響楽団に入ったら、N響のホルン・セクションにはそういうメーカーに対するこだわりがいっさいなかった。全員が、その人がコントロールしやすい楽器がいちばんいい音がするという考え方なんです。それでまたホルトンに替えて、他のメーカーのホルンを併用していた時期もありますが、かれこれもう20年近くになりますね。

――音程以外の面は？

中島　もちろん重要です。確かに大学生の頃は主に音程のことが気になっていましたが、プロになってくると、それだけではすまない。音程のことも、音色のことも、まわりのメンバーや他のセクションとのブレンドも、いろいろ考えなければいけない。少しでも良い楽器を、と思う気持ちは当然ありますから、いろいろな楽器を試してはみるんですよ。でも、総合的にいろいろな楽器を経験した結果、やはりホルトンを選んだということです。

――ホルトンのサウンドの特徴は？

中島　しいて特徴をあげれば、まわりを包み込むというか、溶けるというか……。アメリカの楽器ですから、太くてダークな音と言われますが、決してそうした音色だけの楽器だとは思いません。明るい暗いは、吹き方次第で変わるものです。もともと、ホルンはいろいろな音色が出せる楽器で、そこがまた魅力でもある。金管的で男性的な部分、木管的で女性的な部分。コントロールしやすいということは、出したい音が出せるということ。ホルトンなら、プレイヤーがイメージする音を出すことができます。

中島大之（なかじまひろゆき）

札幌出身。
幼少の頃よりヴァイオリンを始め、14歳でホルンを始める。
1978年東京芸術大学に入学し、同年の東京文化会館推薦音楽会に出演。同大学卒業後83年から88年まで東京フィルハーモニー交響楽団に在籍。89年NHK交響楽団に入団し現在に至る。
94年文化庁在外派遣研修員として英国ロンドンに留学。ロンドン交響楽団のジョナサン・リプトン氏に師事する。
オーケストラはもとより、室内楽、スタジオ・ワーク等、幅広い分野にわたって活躍。東京シンフォニエッタのメンバーとして現代音楽にも取り組み、フェリス女学院大学、昭和音楽大学の非常勤講師として後進の指導にもあたる。

初心者におすすめなのは ホルトンのスタンダード・モデル

――中高生など、初心者にもおすすめのモデルはありますか。

中島　ええ。中高生の場合、息の量が少ないし、手も小さい場合が多いですから、ベルの太い楽器よりも、無理をせず、細めの楽器がよいと思います。ホルトンで言えばH378ER、H479ERなどは初心者でも扱いやすいと思います。ホルンはベルが後ろを向いているから、吹奏楽ではどうしてもトランペットやトロンボーン、サクソフォンに音量的に負けてしまう。そこを吹き方でカバーしなければいけない。ダイナミックスやアーティキュレーション等を強調して吹かないと客席には伝わってこないんです。だから、特に吹奏楽でホルンを始めた初心者がきつい楽器を持ってしまうと大変です。

――楽器選びも重要ですね。

中島　そう。まず音程に癖がないことが絶対条件。音程に癖があると、ただでさえ奏法がちゃんとしていない状態で、何が悪いのかわからなくなってしまう。楽器が悪いのか、自分が悪いのか。音程と、鳴りに癖のない楽器なら、そういうときの助けになります。楽器に助けてもらうことは必要です。僕も楽器に助けてもらっています。

――最後に、吹奏楽でホルンをがんばっている中高生にメッセージをいただけますか。

中島　ぜひ、オーケストラを聴きに行ってほしい。吹奏楽ばかりやっていると、ついがんばって音を出すことに比重を置きがちになります。一方、オーケストラの中のホルンは弦楽器や木管楽器に比べれば音も大きく、ホルン本来の美しく柔らかい音を響かせます。もちろん吹奏楽も楽しいのですが、同時にオーケストラも聴いて、ホルンの多様な魅力を感じてもらいたいですね。

HOLTON NONAKA

総発売元 株式会社ノナカ
〒231-0011 横浜市中区太田町4-46
TEL.045-212-0332（代）

総輸入元 野中貿易株式会社
〒231-0011 横浜市中区太田町4-46
TEL.045-211-2022（代）

野中貿易サイト
http://www.nonaka.com

ホルトン専用サイト
http://www.nonaka-boeki.com/holton

H378ER

● H105ER　価格：1,344,000円（税込み）
フルダブル　ベル材質：ブロンズ

● H378ER　価格：425,250円（税込み）
● H478ER　価格：490,350円（税込み）
フルダブル　ベル材質：イエローブラス

● H379ER　価格：478,800円（税込み）
● H479ER　価格：539,700円（税込み）
フルダブル　ベル材質：ニッケルシルバー

提供：野中貿易株式会社、株式会社ノナカ